



# 甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

June 1991

No. 94



## 房総半島におけるトサヒメハナカミキリとセスジヒメハナカミキリの分布

窪木 幹 夫

千葉県館山市在住の諫川正臣氏より、房総半島で採集されたトサヒメハナカミキリ *Pidonia* (*Cryptopidonia*) *approximata* KUBOKI の標本をいただいた(図1)。従来、房総半島には *Cryptopidonia* 亜属ではセスジヒメハナカミキリ *Pidonia* (*Cryptopidonia*) *amentata* (BATES) の採集記録しかなかったので、本亜属では千葉県2番目の種となった。また、このトサヒメハナの確認がきっかけとなり、他の採集例も明らかになった(橋本, 1990)。

トサヒメハナとセスジヒメハナは出現期、垂直分布、訪花活動性などが異なるものの、関東地方以西の本州太平洋側、四国、九州の山地帯で幅広く混棲する。ところが、九州の島原半島や大隅半島ではセスジヒメハナが棲息せず、トサヒメハナだけが分布する。また、種の組み合わせは異なるものの、伊豆半島でもセスジヒメハナが棲息せず、トサヒメハナに近縁なコトヒメハナ *P. lyra* が分布することが知られている(窪木, 1987)。房総半島でも、これと似

た現象が認められるので報告する。

千葉県産のセスジヒメハナについては次の採集例を確認している。

1♂, 千葉県安房郡天津小湊町清澄山, 21. iv. 1973, 高桑正敏採集(図2); 2♂♂, 清澄山(標高300 m), 19-20. v. 1973, 窪木幹夫採集。

前者は安房天津より清澄山に至る道路沿いで採集されたもので、同時にナガバヒメハナ *P. signifera*, チャイロヒメハナ *P. aegrota*, フタオビノミハナ *P. puziloi* などが採集された。後者は清澄山の清澄寺付近の二次林の調査で採集したもので、同時にフタオビノミハナが採れた。

房総半島でのトサヒメハナとセスジヒメハナの分布を図3に示した。トサヒメハナは脊梁の清澄山系の元清澄山(標高約300 m)とその南側の保台(標高100~130 m), そして南端の白浜町(標高20 m)から記録されている。一方、セスジヒメハナは清澄山から記録されている。両種の混棲地は現在のとこ

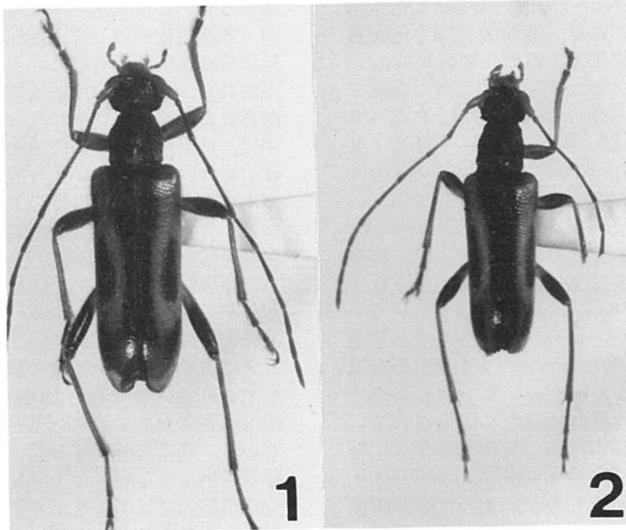


図1~2. 房総半島産 *Pidonia* 属の2種. 1: トサヒメハナ♂, 2: セスジヒメハナ♂



図3. 房総半島におけるトサヒメハナ(▲)とセズジヒメハナ(●)の分布。1, 白浜町長尾; 2, 鴨川町保台; 3, 鴨川町元清澄山; 4, 天津小湊町清澄寺; 5, 天津小湊町安房天津~清澄寺。

ろ確認されていない。

トサヒメハナは関東地方以西の表日本地域のモミヤツガに代表される温帯性針葉樹林からブナ林にかけて棲息する。垂直的には、四国では標高500~1,600 m, 中部, 関東地方では標高600~1,200 mにかけて見られる。房総半島でのトサヒメハナの棲息地はいずれも標高300 m以下の照葉樹林である。房総半島では、なぜトサヒメハナの垂直分布が低くなってしまうのか。換言すれば、なぜ他地域では山地帯の昆虫が丘陵地に生活するのか。この現象はヒメハナカミキリが生活する森林の「垂直分布帯のすづまり現象」(沼田, 1970)で説明できる。房総半島の植生帯は圧縮されており、他地域では下部暖温帯, 上部暖温帯, 冷温帯はそれぞれ標高600 m以下, 600~1,200 m, 1,200 m以上となるが、房総では200 m以下, 200~300 m, 300 m以上になっている。この区分に従えば、本州, 四国, 九州のトサヒメハナは上部暖温帯から冷温帯に、房総のトサヒメハナは下部暖温帯から上部暖温帯に棲息する。

セズジヒメハナのいない島原半島では、トサヒメハナが照葉樹林帯にまでその棲息域を広げ、標高200 mからモミ帯を経て1,150 mのブナ帯下部まで分布する(今坂, 1978)。セズジヒメハナのいない地域では、本来ならセズジヒメハナが生活する標高の低い開放的な環境にもトサヒメハナが棲息域を拡大している。セズジヒメハナのいない伊豆半島でも、コトヒメハナが照葉樹林帯から採集されている。たとえば、天城山系南部の大鍋林道や沼ノ川林道(ともに賀茂郡河津町)がその例である(窪木・鈴木, 1978)。房総半島でもトサヒメハナは照葉樹林帯の開放的な日当りの良い二次林で採集されている(橋本ら, 1990)。房総半島の森林が圧縮され、垂

直分布帯のすづまりをおこす中で、トサヒメハナは上部暖温帯から下部暖温帯へ適応し、その棲息域をより標高の低い、照葉樹林帯の明環境へ広げていったと推定される。

房総半島はどのように形成されたのであろうか。今から約300万年前の第三紀鮮新世のころ、丹沢造山運動という地殻変動で房総南部が隆起し、今の三浦半島と丹沢地域に連なる半島状の地形ができた。一方、房総北部を含む関東平野は入り海となり、この古東京湾は約10万年前の更新世後期まで続いた。南部の半島は、約150万年前、地殻変動により、丹沢方面と切れて三浦、房総の部分が房総島として分離した。約40万年前の更新世後期に、しだいに海は退いて、房総島は北東に延びた。約5万年前の更新世末期には氷河期に入り、古東京湾が陸化し、房総ができた。約1万年前の完新世に氷河期が終わり、海面が上昇し、房総半島がほぼ現在の形になった(湊, 1973)。

トサヒメハナが房総に分布を拡大したのは、地史からみて、約300~150万年前の半島期か、5万年前以降の北総台地形成期の二つの場合が考えられる。房総半島のトサヒメハナはどちらであろうか。房総半島に最も近いトサヒメハナの棲息地は東京都奥多摩町日原小川谷、埼玉県秩父市浦山川広河原、山梨県大月市桑西真木林道などで、中間地域に分布せず、房総の分布が飛び離れている。その中間地域には、伊豆半島、箱根、富士山、丹沢山塊に分布する近縁のコトヒメハナがくさび型にその分布域を広げ、トサヒメハナの分布を分断したかたちになっている。たとえば、コトヒメハナは三頭山、日原本谷、秩父市浦山川広河原などから採集されている。東海地方から関東地方でのトサヒメハナの分布は不連続的で、各個体群が孤立化している。これらの点を考慮すると、トサヒメハナは今から約300~150万年前、寒冷気候に伴って山地性の植生が半島経由で房総に分布を広げた時期にいっしょに入り込んだと推定される。その後の房総島の形成により本州から隔離された。温暖な気候になって照葉樹林が発達した中で、標高からみて垂直分布帯をつくれない房総では、いろいろな植生が入り混じって垂直分布帯のすづまりがおきた。山地性のトサヒメハナも垂直分布が低くなり、わずかな適地を求めて照葉樹林帯に棲息域を広げ明環境に適応し生き延びたのであろう。

島原半島、大隅半島、伊豆半島にセズジヒメハナが分布しない理由に、本種の分布の拡大が比較的最近におきたために、これらの島嶼的地形へのセズジヒメハナの移動が、低地や草原により妨げられたと推定されている(窪木, 1987)。房総半島では脊梁の清澄山系にセズジヒメハナとトサヒメハナが棲息している。両者の分布域の間には移動を阻むような地形は見当たらない。セズジヒメハナの房総半島への分布の拡大には、トサヒメハナと同様に二つの場合が考えられる。一つは、新しい時代、すなわち、5万年前から始まる北総台地形成以降の氷河期にセズジ

ヒメハナが南下し、氷河期が終り温暖になった時、一部の個体群がとり残されたという場合である。もしそうならば、房総丘陵の北部や北総台地にもセスジヒメハナの棲息地が見つかるであろう。もう一つは、トサヒメハナと同じ古い時代の分布の拡大の場合で、もしそうならば、セスジヒメハナは垂直分布帯の寸づまりの影響を受け、房総丘陵地の適地に小集団化した個体群として生活しているであろう。どちらであるかは、今後の調査で明らかにする必要がある。

現在得られている知見から、房総半島におけるトサヒメハナとセスジヒメハナの分布をまとめ、それらの分布形成の過程について考えた。今後は清澄山と鋸山を結ぶ分水嶺以北の上総丘陵や北総台地の調査も望まれる。また、両種の照葉樹林そのものへの生活の依存の程度についても調べる必要がある。

末尾ながら、この報文をまとめるにあたり、採集地の環境や採集情況について教えていただいた海老原裕之、鈴木和利、武智昭一、また貴重な採集品を

下下さった諫川正臣、高桑正敏の各氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

房総の生物編集委員会編著(1985). (沼田 真・大野正男監修) 房総の生物, 292 pp. 河出書房新社, 東京.  
橋本慎太郎・岡部洋一・中山和昭(1990). 房総のトサヒメハナカミキリ採集記録とその検討. かまくらちょう, (24): 23-26.  
今坂正一(1978). 島原半島の *Pidonia* (ヒメハナカミキリ属) について. こがねむし, (2): 1-15.  
窪木幹夫(1987). 日本の昆虫⑤ ヒメハナカミキリ, 171 pp+8 pls. 文一総合出版, 東京.  
—・鈴木和利(1978). コトヒメハナカミキリ——発見のいきさつとその分布について——. 月刊むし, (98): 3-8; (99): 11-15.  
湊 正雄(1973). 目でみる日本列島のおいたち, 60 pls. 築地書館, 東京.  
沼田 真(1970). 垂直分布帯の寸づまり現象. 朝日新聞 4月7日夕刊. (東京都世田谷区)

○口永良部島で得られたゴミムシダマシ 4種

鹿児島県口永良部島は、これまで訪れる採集者も少なく、昆虫相については今なお不詳の部分が多いようである。筆者は同島で得られたゴミムシダマシ科の標本を所持しているので、ここに報告しておく。

*Platydemia marseuli* LEWIS オオツヤキノゴミムシダマシ

5♂♂ 4♀♀, 鹿児島県口永良部島, 9. viii. 1989, 土屋周平採集, 筆者保管.

西南日本からインドシナ, フィリピン, スンダ諸

島にかけて広く分布する種である。

*Platydemia subfascia* (WALKER) ベニモンキノゴミムシダマシ

1♂, 採集データ同上.

東洋熱帯からマダガスカルにいたる広域分布種である。

*Menepphilus arciscelis* MARSEUL オオツヤホソゴミムシダマシ

1♀, 採集データ同上.

*Cryphaeus satoi* KASZAB タカラヒメツノゴミムシダマシ

2♂♂ 3♀♀, 採集データ同上.

トカラ中之島以南, 西表島に至る南西諸島の島々で得られている種である。口永良部島の東方至近にある屋久島からは、本種は報告されていないようである。

末筆ではあるが貴重な標本を恵与された西宮市の土屋周平氏に心よりお礼申し上げます。

(東大阪市, 加藤敦史)

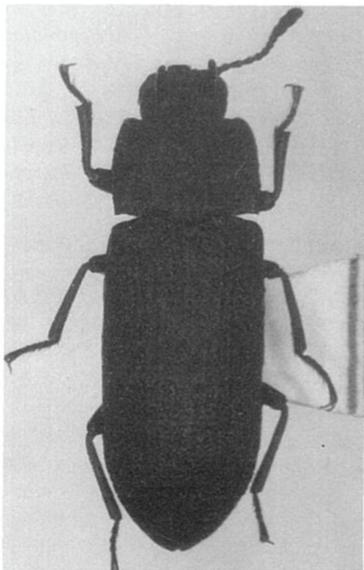
○ホルンナガタマムシの記録についての訂正

本誌第92号で報告した「ホルンナガタマムシの沖縄本島からの記録」で、「沖縄本島からは今まで記録がない」と記述した。しかし、秋山黄洋氏が本誌第29/30号の「琉球列島のタマムシ」で、沖縄本島から本種を記録しているのを知った。お詫びして、第92号の筆者の記述を「ホルンナガタマムシの沖縄本島からの追加記録」と訂正する。

親切にご指摘していただいた関 章弘氏および秋山黄洋氏に厚く御礼を申し上げます。

参考文献

秋山黄洋, 1975. 甲虫ニュース, (29/30). (横浜市中区, 服部宇春)



タカラヒメツノゴミムシダマシ(♂)

## ○キボシケシゲンゴロウ北海道に分布

キボシケシゲンゴロウ *Nipponhydrus flavomaculatus* (KAMIYA) は暖地系の種で、関東地方で東京、千葉(清澄山)、神奈川(逗子市二子山)に記録があるが、東北地方以北での記録はなかった。筆者らは北海道最南端近くで多数採集しているので報告する。

46頭、渡島支庁松前町及部川上流, 24. ix. 1988, 荒木哲, 松本英明採集。

採集地は及部川の上流のごく限られた場所のみであった。他に溪流種はシマチビゲンゴロウ、ゴマダラチビゲンゴロウ、モンキマメゲンゴロウの3種が採集された。当日は道南未記録のゲンゴロウ類の探索に入ったのであるが、予期もしない種に瞬目を疑ったほどである。

発表にあたり千葉、神奈川の記録をご教示いただいた名古屋女子大学の佐藤正孝氏、神奈川県立博物館の高桑正敏氏に感謝いたします。

## 参考文献

杉丸一郎(1979). 清澄, (7), 房総の自然研究会。  
高桑正敏(1987). 神奈川自然誌資料, (8).

(旭川市, 荒木 哲; 同市, 松本英明)

## ○多摩川河川敷のヨツボシゴミムシ類2種の記録

オオヨツボシゴミムシ *Dischissus mirandus* BATES  
1頭, 東京都日野市日野, 4. i. 1991.

河川敷の中の、石と土の混った高さ60cm程の盛り土を崩して、ほぼ中心部で越冬していた個体を採集した。

本種の東京都における採集例は大変少なく、筆者が知り得た記録は板橋区中板橋駅付近(1938年採集)と港区自然教育園(1950年代?)の採集)の2例だけで最近の記録を見ていない。

ニッポンヨツボシゴミムシ *Dischissus japonicus* ANDREWES

1頭(目撃), 東京都稲城市大丸, 13. v. 1990.

河川敷に続く斜面に伐採された枝が積み上げられており、その枝をビーティングしたところ本種が1頭ネットの上に落ちて来た。慌てて手を伸ばすと、もの凄く早さで走ってネットの下に落ちてしまい採集することが出来なかった。

本種は各地に広く分布しているようだが、採集例は多くなく、東京都からは高尾山の1例を知るのみである。(東京都世田谷区, 沢田和宏)

## ○南アルプスおよびハヶ岳のミヤマカミキリモドキ

ミヤマカミキリモドキ *Ditylus laevis* (FABRICIUS) は、北海道および本州中部以北の山地に分布し、幼虫はトドマツの枯木内で生活することが知られている。しかし本州における採集例はまだ少ないようであるが、筆者らは、南アルプスとハヶ岳で本種を採集しているので、採集地の環境をも併せ、ここに記録しておくたい。

2頭, 山梨県芦安村大仙丈沢出合, 8. vii. 1990, 鎌

倉採集。

後方に雪渓をかかえた沢沿いの流木の堆積にて甲虫類を採集していたところ、一頭は流木上で発見し、もう一頭は猛スピードで飛翔していた。

1頭, 山梨県芦安村両俣小屋付近, 8. vii. 1990, 鎌倉採集。

沢べりの石の上で、死後まもない軟らかい個体を拾った。いずれの地点も亜高山性の針葉樹林に囲まれている。

9頭, 山梨県大泉村・高根町境界(大門川), 23. vi. 1990, 長畑採集。

アラメハナカミキリを採集中に、主に枯沢の石の上を徘徊していたもの。標高は約2,000mで、周囲は針葉樹をまばらにまじえた広葉樹林、枯沢には古い倒木が数多くあった。本種は、北海道では針葉樹林帯の沢沿いで得られることが多く、また付近に倒木や流木があることが多い。本州でも北海道と似た環境で得られており、本種が幼生期を倒木や流木内で生活する可能性があることを付記しておきたい。

(埼玉県浦和市, 鎌倉正人; 同上尾市, 長畑直和)

## ○シモヤマミズギワゴミムシ福島県の記録

シモヤマミズギワゴミムシ *Bembidion* (*Neomphanes*) *shimoyamai* HABU は基産地の青森県のほか岩手県、群馬県、さらに近年北海道\*から記録され、北日本を中心に広く分布しているものと推定される。しかし東北各県においても他に採集例はなくきわめて少ないものようである。筆者は福島県松枝岐村において本種を採集したので一産地の記録として報告する。

1頭, 福島県松枝岐村大杉岳付近(標高約1,200m), 24. vi. 1990, 筆者採集。

溪流中の大きな石の上に静止していたもので、溪畔にはヨツアナミズギワゴミ等の *Bembidion* 数種が多数見られたが、本種はそれらの中には見いだせなかった。最後に発表をお勧め下さった森田誠司氏に厚くお礼申し上げます。(群馬県伊勢崎市, 須田 亨)

\* MORITA, S., & H. MATSUMOTO, 1989. Notes on the Bembidiinae (Carabidae) of Japan. II. *Bembidion shimoyamai* HABU in Hokkaido. *Elytra*, Tokyo, 17: 122.

## ○沖縄島でのアカツヤツツヒラタムシの記録

アカツヤツツヒラタムシ *Hectarthrum tenuicorne* GROUVELLE はこれまで、日本においては奄美大島からしか記録されていなかった。しかし、筆者は、沖縄島より持ち帰ったシバニッケイの枯木より本種を羽化させたのでここに報告をする。採集データは、下記のとおりである。

1頭, 沖縄県国頭村伊楚林道, 10. x. 1988, 材採取, x. 1989, 羽化。(森林総研東北, 横原 寛)

甲虫類の分布解明のために、どしどし原稿をお寄せ下さい。原稿が多く集まれば12頁立て。ご希望により別刷を50部単位で実費にて作製いたします。原稿第1頁右上に部数を朱書して下さい。

## 沖繩本島・石垣島・西表島の水生甲虫類

松井英司

著者は、1990年8月に沖繩本島・石垣島・西表島において水生甲虫を採集した。以下にその目録を報告しておきたい。ここに、種名の確定していない4種を含め、9科35属64種を記録する。その内訳は、コガシラミズムシ科2属2種、コツブゲンゴロウ科3属3種、ゲンゴロウ科13属28種、ミズスマシ科3属5種、ダルマガムシ科1属1種、ホソガムシ科1属1種、ガムシ科10属21種、マルハナノミ科1属2種、チビドロムシ科1属1種である。またガムシ科には、この目録に含まれなかった数種がある。また、データ中の数字は、採集した頭数と1990年8月における日付を示す。採集者はすべて著者である。

なお、目録に先立ち、今回の琉球列島での採集でお世話になった、長崎祐二(沖縄県畜産試験場)夫妻、ロンサムカヌーボーイこと吉岡彰太君、そして、新堀和義君(農林水産省種苗管理センター)、石垣島で出会ったチャリダーの浅野湖君に心から感謝の意を表する。

Family Haliplidae コガシラミズムシ科

1. *Peltodytes sinensis* (HOPE, 1845) シナコガシラミズムシ

石垣島: 明石(1頭, 6.), 久宇良(22頭, 6.), 底地(1頭, 12.), 名蔵(4頭, 13.)

2. *Haliplus kotoshonis* KANO et KAMIYA, 1931 コウトウコガシラミズムシ

沖繩本島: 大宜味村喜味原(25頭, 16.); 石垣島: 栄(1頭, 5.)

Family Noteridae コツブゲンゴロウ科

3. *Noterus japonicus* SHARP, 1873 コツブゲンゴロウ

西表島: 千立(32頭, 8.), 古見(19頭, 9.)

4. *Neohydrocoptus subvittulus* MOTSCHULSKY, 1859 チビコツブゲンゴロウ

沖繩本島: 大宜味村喜味原(1頭, 16.); 石垣島: 大野(2頭, 6.), 大里(12頭, 12.), 名蔵(5頭, 13.), 伊原間(3頭, 5.); 西表島: 南風見田(36頭, 7.), 古見(6頭, 9.)

沖繩本島からは、新記録である。

5. *Canthydrus nitidulus* SHARP, 1882 ツヤコツブゲンゴロウ

沖繩本島: 大宜味村喜味原(14頭, 16.), 本部町宇茂佐(2頭, 17.); 石垣島: 栄(17頭, 5.), 大里(2頭, 12.), 底地(3頭, 12.); 西表島: 千立(2頭, 8.), 古見(16頭, 9.)

Family Dytiscidae ゲンゴロウ科

6. *Hyphydrus pulchellus* CLARK, 1863 コケシゲンゴロウ

沖繩本島: 大宜味村喜味原(4頭, 16.), 本部町宇茂佐(48頭, 17.); 石垣島: 栄(5頭, 5.), 伊原

間(25頭, 5.), 明石(154頭, 6.), 久宇良(2頭, 6.), 大野(1頭, 6.), 底地(1頭, 12.); 西表島: 千立(1頭, 8.), 古見(30頭, 9.)

7. *Hyphydrus lyratus* SWARTZ, 1808 タイワンケシゲンゴロウ

石垣島: 明石(32頭, 6.), 名蔵(1頭, 13.)

8. *Hydrovatus bonvouloiri* SHARP, 1882 オオマルケシゲンゴロウ

石垣島: 栄(2頭, 5.), 久宇良(7頭, 6.), 大里(1頭, 12.); 西表島: 古見(21頭, 9.)

9. *Hydrovatus acuminatus* MOTSCHULSKY, 1859 コマルケシゲンゴロウ

石垣島: 栄(2頭, 5.), 伊原間(20頭, 5.), 明石(17頭, 6.), 大里(1頭, 12.), 底地(14頭, 12.), 名蔵(16頭, 13.); 西表島: 南風見田(8頭, 7.), 大原(1頭, 7.), 古見(165頭, 9.)

10. *Hydrovatus subtilis* SHARP, 1882 マルケシゲンゴロウ

石垣島: 栄(21頭, 5.), 明石(2頭, 6.), 底地(1頭, 12.), 名蔵(3頭, 13.); 西表島: 千立(1頭, 8.), 古見(10頭, 9.)

11. *Hydrovatus pumilus* SHARP, 1882 チビマルケシゲンゴロウ

石垣島: 伊原間(15頭, 5.); 西表島: 南風見田(13頭, 7.)

12. *Hydrovatus matsuii* NAKANE, 1990 アマミマルケシゲンゴロウ

=*Hydrovatus* sp.: (松井, 1988/1990 a)

石垣島: 底地, 名蔵(松井, 1990 c)

13. *Hydrovatus* sp. マルケシゲンゴロウの一種

石垣島: 大里(2頭, 12.)

奄美大島・西表島からも採集されている(著者採集)。

14. *Uvarus tokarensis* M. SATÔ, 1972 ナガチビゲンゴロウ

石垣島: 名蔵(2頭, 13.)

15. *Guignotus japonicus* (SHARP, 1873) チビゲンゴロウ

沖繩本島: 大宜味村喜味原(2頭, 16.), 本部町宇茂佐(1頭, 17.); 石垣島: 栄(1頭, 5.), 明石(5頭, 6.), 大里(1頭, 12.), 底地(1頭, 12.), 名蔵(6頭, 13.); 西表島: 千立(1頭, 8.), 祖納(2頭, 8.), 古見(11頭, 9.)

16. *Guignotus inconstans* (RÉGIMBART, 1892) チャマダラチビゲンゴロウ

石垣島: 伊原間(31頭, 5.), 栄(23頭, 5.), 明石(136頭, 6.), 嘉良川(4頭, 6.), 久宇良(5頭, 6.), 底地(1頭, 12.), 大里(9頭, 12.), 底原(1頭, 12.), 嵩田(3頭, 12.), 名蔵(6頭, 13.); 西表島: 大宮(1頭, 7.), 南風見田(2頭,

- 7.), 古見(6頭, 9.)
17. *Guignotus kifunei* NAKANE, 1987 キオビチビゲンゴロウ  
西表島: 古見(松井, 1990 d)  
石垣島より1♂で記載され, その後採集されていなかった種である.
18. *Clypeodytes orissaensis* UAZIRANI, 1968 サビモンマルチビゲンゴロウ  
沖縄本島: 本部町宇茂佐(1頭, 17.); 石垣島: 栄(1頭, 5.), 明石(13頭, 6.), 大里(12頭, 12.), 嵩田(1頭, 12.), 名蔵(1頭, 13.); 西表島: 南風見田(16頭, 7.), 干立(1頭, 8.), 古見(8頭, 9.)
19. *Herophydrus rufus* (CLARK, 1863) タマケシゲンゴロウ  
石垣島: 明石(8頭, 6.), 底原(33頭, 12.), 大里(1頭, 12.), 底地(1頭, 12.), 名蔵(7頭, 13.); 西表島: 古見(40頭, 9.)
20. *Laccophilus difficilis* SHARP, 1873 ツブゲンゴロウ  
西表島: 古見(3頭, 9.)
21. *Laccophilus chinensis* BOHEMAN, 1858 ウスチャツブゲンゴロウ  
石垣島: 栄(8頭, 5.), 伊原間(1頭, 5.), 明石(23頭, 6.), 大野(2頭, 6.), 底地(2頭, 12.), 名蔵(5頭, 13.)
22. *Laccophilus pulicarius* SHARP, 1882 ミナミツブゲンゴロウ  
石垣島: 栄(1頭, 5.), 大里(1頭, 12.); 西表島: 南風見田(3頭, 7.), 古見(2頭, 9.)
23. *Laccophilus sharpi* RÉGIMBART, 1889 アヤナミツブゲンゴロウ  
沖縄本島: 大宜味村喜味原(2頭, 16.), 本部町宇茂佐(2頭, 17.); 石垣島: 伊原間(4頭, 5.), 栄(11頭, 5.), 大野(4頭, 6.), 明石(12頭, 6.), 大里(2頭, 12.), 底地(11頭, 12.), 名蔵(9頭, 13.); 西表島: 干立(3頭, 8.), 祖納(3頭, 8.), 古見(3頭, 9.)
24. *Copelatus subfasciatus* ZIMMERMAN, 1919 クロセスジゲンゴロウ  
西表島: 古見(1頭, 9.)
25. *Copelatus tenebrosus* RÉGIMBART, 1880 タイワンセスジゲンゴロウ  
沖縄本島: 本部町宇茂佐(9頭, 17.); 石垣島: 栄(2頭, 5.); 西表島: 古見(6頭, 9.)
26. *Copelatus* sp. セスジゲンゴロウの一種  
西表島: 古見(1頭, 9.)  
与那国島からも採集されている.
27. *Platynectes chujo* M. SATÔ, 1982 アトホシヒラタマメゲンゴロウ  
西表島: カンビレ滝(49頭, 8.)
28. *Rhantus pulverosus* (STEPHENS, 1828) ヒメゲンゴロウ  
沖縄本島: 大宜味村喜味原(3頭, 16.), 今帰仁村謝志(4頭, 16.), 本部町宇茂佐(4頭, 17.); 石垣島: 栄(1頭, 5.), 久宇良(1頭, 6.), 大野(1頭, 6.), 明石(3頭, 6.); 西表島: 古見(5頭, 9.)
29. *Eretes sticticus* (LINNÉ, 1767) ハイイロゲンゴロウ  
沖縄本島: 今帰仁村謝志(1頭, 16.)  
他にも3頭を目撃したが, 採集はできなかった.
30. *Hydaticus vittatus* (FABRICIUS, 1775) オキナワスジゲンゴロウ  
石垣島: 伊原間(13頭, 5.), 栄(5頭, 5.), 明石(41頭, 6.), 久宇良(1頭, 6.), 大野(1頭, 6.)
31. *Hydaticus rhantoides* SHARP, 1882 ウスイロシマゲンゴロウ  
沖縄本島: 大宜味村喜味原(1頭, 16.), 本部町宇茂佐(7頭, 17.); 石垣島: 伊原間(14頭, 5.), 栄(14頭, 5.), 明石(5頭, 6.), 大野(8頭, 6.), 底原ダム(1頭, 6.), 久宇良(1頭, 6.), 名蔵(1頭, 13.); 西表島: 古見(8頭, 9.)
32. *Cybister sugillatus* ERICHSON, 1838 トビイロゲンゴロウ  
沖縄本島: 大宜味村喜味原(5頭, 16.); 石垣島: 伊原間(2頭, 5.), 久宇良(2頭, 6.), 明石(4頭, 6.), 大野(2頭, 6.), 底地(2頭, 12.), 大里(3頭, 12.); 西表島: 古見(7頭, 9.)
33. *Cybister tripunctatus orientalis* GSCHWENDTNER, 1931 コガタノゲンゴロウ  
石垣島: 明石(6頭, 6.), 大野(2頭, 6.), 底地(10頭, 12.), 名蔵(2頭, 13.); 西表島: 古見(3頭, 9.)  
Family Gyrinidae ミズスマシ科
34. *Dineutus australis* (FABRICIUS, 1775) ツマキレオオミズスマシ  
沖縄本島: 今帰仁村謝志(20頭, 16.); 石垣島: 栄(10頭, 5.), 明石(74頭, 6.), 久宇良(2頭, 6.), 底原ダム(1頭, 12.), 底原(26頭, 12.), 名蔵(40頭, 13.); 西表島: 大原(12頭, 7.)
35. *Dineutus mellyi insularis* RÉGIMBART, 1882 オキナワオオミズスマシ  
沖縄本島: 大宜味村饒波川(6頭, 16.), 国頭村比地の滝(5頭, 16.), 大宜味村喜味原(24頭, 16.)  
比地川では, 200個体以上を目撃, 水面に群れて, ほとんど静止していた. 大宜味村喜味原でも数え切れないくらいの個体を目撃した.
36. *Dineutus orientalis* (MODEER, 1776) オオミズスマシ  
沖縄本島: 大宜味村喜味原(1頭, 16.)
37. *Gyrinus ryukyensis* M. SATÔ, 1971 リュウキュウヒメミズスマシ  
沖縄本島: 今帰仁村謝志(1頭, 16.), 大宜味村喜味原(119頭, 16.), 本部町宇茂佐(3頭, 17.)
38. *Orectochilus yayeyamensis* M. SATÔ, 1971 ヤエヤマコオナガミズスマシ  
西表島: カンビレ滝(51頭, 8.)

以下次号に続く.

◇Elytra 編集委員会からのお知らせ◇

昨年12月に開催された常任幹事会と総会で、本学会の機関誌 *Elytra* の第19巻(1991年)に対して、印刷ページで約150ページ分の予算を割り振るという提案がなされ承認されました。したがって、1号当たりの予算は約75ページ分になります。同時に、論文のページ制限をきびしくする案と、無料の別刷を廃止または半減する案なども検討されましたが、当分のあいだは現行どおりに進めようという線に落ち着きました。

1991、'92の両年につきましては、従来どおりに到着順に原稿を受けつけ、予算額に達した時点で締切りにします。制限ページは印刷時の10ページ、ページ大の写真是1葉以内です、印刷ページが10ページを超える論文は、締切り以前に受領したもので、超過部分の印刷費を負担していただきます。原稿はすべて校閲にかけますので、かなり大幅な改訂を要求されることもあります。よほどの場合でないかぎり、原則として却下はしない方針です。

締切りの期限はその都度変わりますが、だいたい発行日(5月15日と11月15日)の5ヵ月ぐらい前とを考えていただくとよいと思います。それ以後に到着した原稿は次号まわしになります。ただし、印刷費の全額を負担していただける場合には、受領の順にかかわらず、すぐ次の号に掲載いたします。この分の掲載ページ数は余分になりますので、締切りまでに受領した論文を圧迫することはなく、会員には予定以上に立派な雑誌をお届けできるわけです。

別刷は、表紙のつかないもの50部が無料で、それ以上は原則として50部単位で作製します。この分の費用と別刷の表紙代は、いずれも個人負担になります。

なお、*Elytra* は、論文ごとに奇数ページ起こしとなる編集方針をとっていますので、空白を埋めるための短報がかなり必要です。和文、欧文のどちらでも結構ですから(ただし和文の場合には、欧文の標題が必要ですが)、原則として1印刷ページ以内の短報をお寄せ下さい。短報の別刷は、本論文と同じ扱いで作製いたします。

◇会務報告◇

1989-90年度の幹事は、旧日本鞘翅目学会と旧甲虫談話会の役員をそのまま受け継いでかなり多人数でしたが、その際の協議結果に基づき、さる平成2年12月9日に港区虎ノ門の教育会館で開催された、日本鞘翅学会大会の総会において、役員および編集委員が以下のとおり承認され、幹事は会長、副会長を含めて18名となりました。なお、都合により、甲虫ニュース編集幹事は94号より阿部光典氏から妹尾俊男氏に変更されましたので、現在の幹事数は17名になります。

会長 上野俊一、副会長 露木繁雄  
 常任幹事(8名) 岩田隆太郎(庶務)、斉藤明子(会計)、新里達也(*Elytra* 編集)、阿部光典(甲虫ニュース編集)、佐藤正孝(渉外)、中村俊彦(大会)、笠原須磨生(例会)、江本健一(木曜談話会)

◇会 計 報 告◇

1989年度 決算

収 入	予 算	決 算	増 減
前年度繰越金	0円	1,514,860円	1,514,860円
会費	2,000,000	2,264,000	264,000
広告費	120,000	100,000	-20,000
出版物売上金	84,000	83,100	-900
大会会場費	100,000	77,500	-22,500
雑収	0	67,138	67,138
寄付	0	900,000	900,000
合 計	2,304,000	5,006,598	2,702,598
支 出	予 算	決 算	増 減
会誌印刷費( <i>Elytra</i> )	1,030,000円	2,008,876円	978,876円
(甲虫ニュース)	395,520	392,534	-2,986
会誌送料	264,000	373,968	109,968
通信費	90,000	105,322	15,322
事務費	100,000	74,285	-25,715
大会会場費	60,000	100,150	40,150
予備費	364,480	160,769	-203,711
次年度繰越金	0	1,790,694	1,790,694
合 計	2,304,000	5,006,598	2,702,598

(会計担当: 斉藤明子)

幹事(8名) 藤田 宏, 平野幸彦, 穂積俊文, 久保田正秀, 森本 桂, 大林延夫, 妹尾俊男, 遠山雅夫  
 会計監査(2名) 小宮義璋, 須賀邦耀  
 Elytra 編集委員(5名) 渡辺泰明(委員長), 森本桂, 岡島秀治, 高桑正敏, 新里達也

以上の役員の任期は2年です。

(庶務担当: 斉藤明子)

#### ◇大会報告◇

日本鞘翅学会第3回大会は、昨年12月9日、東京の国立教育会館において開催された。会務報告に続き、任期満了にともなう役員の変更が行われ、次期役員が承認された。引き続き名誉会員の推薦が行われ、本会の前身である甲虫談話会および日本鞘翅目学会それぞれの指導かつ発展において、多大なる貢献をなされた、黒澤良彦博士、草間慶一博士の両先生が満場一致で承認された。これを記念した特別講演として、黒澤先生からは、先生がかねてから疑問に思われていたオオルリオサムシとアイヌキンオサムシの形態の類似について、草間先生からは、先生の長年にわたるカミキリムシ採集の変遷についての講演があった。

この後招待講演として、国立科学博物館の上野俊一博士より台湾の高山帯の採集談があり、豊富なスライドを用いて3,000m級の山岳地帯での採集の様子やそこへ至る途中での数々の難所の風景、たまたま出会われた高砂族の結婚式などの紹介があった。

続いて一般講演として、斉藤秀生氏の「奈良弥山の *Pidonia* 相」、三宅義一氏の「日本産オオトラフコガネについて」、三宅義一・岩瀬一男両氏の「台湾産オオトラフコガネ属について」の3題の講演があった。その後同定会に移り、定刻に解散となった。

大会後は、有志による懇親会が同会館のレストランにおいて行われた。狭い会場は、アルコールを片手にした虫屋で溢れんばかりであった。

(大会担当: 大木 裕)

#### ◇例会報告◇

今年度の第1回例会を3月24日(日)午後1時より上野・国立科学博物館4階実験講義室で行ないました。会務報告に次ぐ講演は、渡辺泰明氏(東農大教授)による「中国浙江省烏岩嶺採集談」。

人立入禁止の特別保護区における調査の様子が、景観と動植物をまじえた多数のスライドによって紹介されました。小憩の後、一人一話は、遠来の鈴木邦雄氏(富山大教授)のCROWSON博士訪問談や上野俊一会長による中国で新発見の珍奇なゴミムシの図示など、興味深く多彩な話題が次々に披露され、和やかな雰囲気のうちに午後5時閉会いたしました。参加者35名。

なお、散会後も半数の有志が上野公園内のパーラーで茶話会を楽しみ、さらにその半数が虫談の続きもかねた夕食会へと春宵の街に繰り出したことを蛇足ながら報告いたします。

(例会担当: 笠原須磨生)

#### ◇『甲虫ニュース』の原稿送付先の変更◇

阿部光典氏のおとを受け、妹尾が『甲虫ニュース』の編集を担当するようになりました。それにとまなまいて、原稿の送付先を下記に変更させていただきます。前任者と同様に宜しく申し上げます。

〒184 東京都小金井市貫井北町3丁目22番1号  
 中央大学附属高校生物研究室 妹尾俊男  
 TEL 0423 (81) 5411; FAX 0423 (83) 4840

#### ◇編集後記◇

本号は連絡報告事項が多くなりましたが、次号からはまた甲虫の分布記録等で一杯にしたいと思います。発行は9月上旬を予定していますので、至急原稿をお寄せください。写真や図があれば、なお結構です。

本学会の会員の白水隆博士が先日、勲二等瑞宝章を受賞されました。「勲勉は“ご苦労さん”という意味ではなく“まだまだ頑張れ”という意味に受け取っています」とコメントされています。

#### 日本鞘翅学会

会費(一ケ年)5000円、次号は1991年9月上旬発行予定

発行人 上野俊一

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町3-23-1  
 国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364)2311, 振替 東京8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

#### 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 東京(3)21129

電話(03)3409-6401(ムシは一番)

FAX (03)3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

#### タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850(以下同様), 第2地帯 ¥1,500, ¥950, 第3地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

#### タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島2-21-25

電話(03)3811-4547, 振替6-113479